

BOOK REVIEW

盆栽の宇宙誌

ロルフ・スタン 著 福井文雅 明神洋 訳 せりか書房

昨年、ロサンゼルスタイムズにこんな記事が載りました。

ここ数十年間、日本のグリーン・サムたちはエキゾチックな（日本的な）鉢植え、特にコレクションの王道ともいえる盆栽を賞翫するためにあるデパートの屋上に通ったものだった。しかし昨年の春、小さく仕立てられた松や梅の木は売り場から姿を消した。「盆栽には日本古来の美学のエッセンスがにじみ出ている、けれどもそれは売れなくなったのです」——デパートの広報担当者はそう説明する。

かわりにそのデパートがつくったのは、イギリスのパステルの装いをしたガーデン・ショップだった。ラベンダーやバラ、それにハーブ、ワイルドフラワー、トピアリー、ハンギングバスケット、ウィンドウボックスにコンテナガーデンが、コンクリートの灰色を和らげるコテージガーデン風にアレンジされて入ってきた。

盆栽に代表される日本の庭が売れなくなってきたのは、それが飽きられたからではなく、ますます洋風化するライフスタイルにあわなくなってきたからだ、とその記事は続けています。盆栽とは、ここではまさに古びたライフスタイルの象徴として使われているのです。

ところで、デパートの広報担当者のいう、盆栽に込められていた日本古来の美学のエッセンスとはどんなものでしょうか。盆栽とは、盆の上ののっているものを刈り込まれ、矮化された植物に限らなければ、いわゆる箱庭の一つと考えることができます。自然のある理想化された形を凝縮して小さな盆の上に表現したもの、ベトナムでは假山（ヌイ・ノン・ボ）と呼ばれ、中国、日本では盆栽、盆景、盆石、さらには盆絵などと呼ばれる汎東アジア的なミニチュアの庭なのです。このミニチュアが、なぜ日本の、あるいは東アジアの庭を代表するものとして語られるのでしょうか。この本によれば、そこには小宇宙の中に大宇宙があり、したがって小宇宙を操作することで大宇宙も操作することができる、という中国の古くからの思想が体現されているからです。我々が盆栽に感じる古くささ、老人くささのイメージは、それがかつて邪気を払う霊力を持ち、秘術のひとつであった名残りが、形だけ残されているためだといえるかもしれません。それにしても、盆栽をつくるのに、わざわざ針金で枝を押さえこんで、むりやりねじれた形をつくったりするのは何故なのでしょう。実はこれも、下記の一節が明快に答えてくれます。

道教徒は身をねじって、首や手足をのぼしたり、からだをさかさにぶらさげたりする。つまり自然な状態に達するためには、まず無理な体形を作らなくてはならない。だから小さな木を栽培するにあたっては、技巧を用いながら自然の再現をはかるのである。道教徒は鶴や熊のように手足を屈伸させ、気をあまねく行きわたらせる。こうして長生を得るのである。一方、小さな木を曲げて樹液の導管をのぼすと古樹になる。

技巧？ ^{フォーリー}愚行？ 日本的な庭であれ、イングリッシュ・ガーデンであれ、その背後には自然の理想化の方法というまだまだ巨大なバックボーンが横たわっていそうです。